

## はじめに

学校は今、「いつ割れるかわからない風船」を抱えているような、過酷ではりつめた空気感に包まれています。山積する課題が、何一つと言ってよいくらい解決の糸口も見いだされないまま、今も止まらずに稼働しています。本来業務である「子どもの学び」への対応になかなかたどり着けず、日々の授業準備も追いつかないまま教室に向かう毎日が続いています。メンタルヘルスの不調による休職者が毎年のように過去最多を記録し、代替の教師のなり手も来ないマイナス状況の中、必死のやりくりが続いています。余裕がない、やっつけ仕事の日々。どんなに声高に叫んでも、支援の手は届かない。空回りするばかりの教育政策。現場の声など全く届いていないのではないかと……。そんな思いを多くの教師が胸に抱きながら、毎日穴を空けずに学校に行くことだけに精いっぱいな状況に置かれています。

そのような状況の中、2022年4月、『教室マルトリートメント』（東洋館出版社）という書籍を刊行しました。

子どもの心を傷つける何気ない言葉、子どもたちを委縮させる威圧的・支配的な態度、恫喝や子どもの事情を踏まえない頭ごなしの叱責、「もういい、さよなら」などの見捨てるような関わりなど、不適切な関わりを具体的に取り上げつつ、なぜこのような状況が生まれるのか、構造的な問題や背景について考えた書籍です。

教育現場における不適切な関わりは、これまで、資質や能力に欠けた教師の個人的な問題であるかのごとく捉えられてきました。しかし、前述したような現場の状況を踏まえれば、誰もが陥る可能性があり、むしろ教育界の構造的な問題に端を発していると考えられるべきではないかと、同書では指摘しました。本当は「子どもたちの前で、いつも笑顔を絶やさず、穏やかな気持ちでいたい」と思い描いていても、それを実現できるだけの心の余裕が確保されていない……。教師という仕事に付きまとう不安や焦りに寄り添うことなくしては、不適切な関わりの問題は解決しないということも述べました。

そんな書籍の内容に共感の声が集まり始めたことを受け、同年夏に、問題意識の重なる書籍を書かれている専門家をごストにお招きし、3回シリーズの刊行記念オンラインセミナーを実施しました。そのイベントの内容を加筆修正し掲載するとともに、あらためて、教師が子どもたちにとっての「安全基地 (Secure Base)」としての役割を果たすために何ができるのかを考えること、これが本書の目的です。

序章では、教室マルチリトメントが起きやすい背景や、それを考えるポイントをあらためて整理しました。前作をまだお手にとっていないという方にも、教室マルチリトメントについて把握できるように心がけました。

第1章では、武田信子先生との対談を掲載しました。武田先生は昨今の社会全体が、子どもたちの発達の変化や道筋を知らないまま、よかれと思ってしたことが子どもたちの育

ちを阻害している可能性を示唆されています。「子どもの権利に無頓着な社会から変えていこう」というメッセージに参加者一同の心が奮い立つ対談になりました。

第2章では、村中直人先生との対談を掲載しました。村中先生のご著書『叱る依存』がとまらない』（紀伊國屋書店）で語られている内容は、筆者の前作の主張と合致しています。対談では「なぜ人は、相手に対するネガティブな関わりを止められないのか」という人の関わりの本質に迫りました。

第3章では、荻上チキさんとの対談を掲載しました。荻上さんも、教師の仕事量の多さと学校のマンパワー不足が喫緊の課題であることを指摘され、具体的なアクションを起こしていらっしゃいます。そして、精神的な疲労や危機への関心が薄いことを取り上げ、学校が「安全基地」としての機能を果たすためのアイデアを示していただきました。

第1章から第3章には、対談だけでなく、参加された方々のチャットのコメントや、終了後のご感想も掲載しました。臨場感溢れる感覚をお楽しみいただけることと思います。そして、第4章では、対談を振り返りながら「教室マルトリートメントの処方箋」というテーマで、現場にいる私たち教師一人ひとりができることをまとめました。思い描いたとおりに進まない現実と直面したときの、物事の捉え方にも踏み込んでいます。

本書が、学校現場やそれを支える全ての関係者の方々に届くことを願ってやみません。

川上康則

## 〔凡例〕

○本書では、全ての学校種を対象と考え、通常の学級・特別支援学級（通級指導含む）・特別支援学校という区分けをあえて行わないスタイルをとっています。具体的な事例が書かれている場合も、基本的には学級の種類を限定していません。ただし、付記が必要だと思われる場合には「特別支援学校では……」などのように、場面を限定することとしています。

○事例の使用に関しては、本人および保護者から許可・承諾を得たもののみを使用しています。また個人情報の保護、研究倫理の観点から、複数の事例情報を組み合わせたり、内容を一部変更したりしながら、個人が特定されないように十分な配慮を行っています。

○本書の製作に当たっては、セミナー参加者全員に対して内容を書籍化する旨とチャット上のコメントを使用する旨を報告しています。また、「参加者のみなさまからの声」のページは、セミナー後に実施したアンケートの中から、東洋館出版社のコンテンツへの掲載に対して「可」とご回答のあったコメントのみを抜粋し、誤字脱字や補足等の最低限の加筆修正を加えた上でご紹介しています。

○本書に掲載しているウェブページのURLおよびQRコードは全て2023年7月25日閲覧時点のものです。

## 序章 教室マルチリートメントを考えるポイント

- マルチリートメントの概念の整理 012 / ネガティブなヒドウンカリキュラムが子どももの「育つ権利」を奪っている 015 / 処分の対象にはなっていないグレーゾーンを言語化する 018 / 教室と職員室をつなぐマインドセット 021 / なぜ、教室マルチリートメントは続くのか？ 023 / 教師もまた「権威勾配」の影響を受ける当事者である 027 / 「働き方改革」がもたらした「時間をかけたたくない」気持ちの増長 030 / 不適切な関わりはトラウマを残す 034 / 教室マルチリートメントがもたらすさまざまなストレス 036 / 不穏で尖った空気を感をつくり出す「毒語（毒のある言葉）」 038 / あらためて子どもへの適切な関わりを考える 043 / 「安全基地」としての教師の役割 044

# 「やりすぎ教育」と教室マルチリートメント

対談 武田信子×川上康則

「イントロダクション／川上より」私たちはなぜ、機嫌よくいられなくなるのか<sup>053</sup>／「枠組み」の存在と「あるべき姿」の呪い<sup>056</sup>／教師の「恥ずかしい」は二重構造<sup>062</sup>／社会環境と子どもの変化<sup>065</sup>／教師の認知バイアス<sup>068</sup>／「ないものねだり」から「あるもの探し」へ<sup>070</sup>／「やりすぎ教育」と教室マルチリートメント<sup>076</sup>

「講演／武田より」「やりすぎ教育」を生む社会的マルチリートメント<sup>079</sup>／エデュケーショナル・マルチリートメントという言葉<sup>080</sup>／大人から子どもへのデイスエンパワメント<sup>088</sup>／子どもにかかるストレス<sup>095</sup>／日本は「幸せな国」と言えるか？<sup>099</sup>／子どもの権利条約<sup>101</sup>／「生き残る力」VS.「共に生きる力」<sup>102</sup>

「対談」子どもに試練を与える教師<sup>110</sup>／教師教育とセルフスタディ<sup>116</sup>  
 「Q & A」安全に失敗できる場で、レジリエンスを高める<sup>121</sup>／枠にとられすぎない<sup>124</sup>／教師に、安全な基地を<sup>127</sup>／自分の違和感を大切にする<sup>130</sup>

参加者のみなさまからの声<sup>138</sup>

対談を終えて 国際的な視点から見るエデュケーショナルマルチリートメント（武田信子）<sup>142</sup>

付録資料<sup>148</sup>

## 学校現場の〈叱る依存〉と

## 教室マルチリートメント

対談 村中直人×川上康則

「イントロダクション／川上より」感情労働としての教師 155 / あれもこれも最優先 160 / 自分で自分に「とらわれない」と言い聞かせる 166 / 強い庄と弱い庄 168 / 学校現場の〈叱る依存〉と教室マルチリートメント 172

「対談」アディクション（依存）という視点から 176 / 叱る人の「苦しみ」に思いをはせる 184 / 「叱る」も「褒める」も、後さばき 188 / 防衛モードと冒険モード 192 / 無力化される子どもたち 197 / 権力者の立場から降りる 202 / “前さばき”のススメ 204 / ないものねだりではなく、あるもの探しを 208 / 子どももの“立つ瀬”を考える 216 / ニューロダイバーシティなものの見方 218 / 「Q & A」予測力の精度を上げる 221 / 「目的・目標」を権力者から切り離す 225 / 社会に吹く風を変えよう 230

参加者のみなさまからの声 236

対談を終えて “あるべき姿”と向き合い続ける（村中直人） 240

## 子どもの「心理的危機状態」とは何か

## ——教室マルチリトメントの視点から考える

対談 荻上チキ×川上康則

「イントロダクション／川上より」学級の荒れの山場 249 / 環境要因の重要性 252 / 教室を重  
く苦しめているもの 257

「レクチャー」研究データをもとにいじめ対策を 266 / いじめは減少しつつある 270 / いじめとト

リートメント／マルチリートメント 272 / いじめ対策の1・2・3 277 / がらりと変わる、先生の

「モード」 280

「対談」複数担任制やサポート人員との権限の分配の重要性 283 / 心理的危機状態とは何か 289

／「連休明けブルー」にご用心 302 / 不機嫌な教室とご機嫌な教室 306

「Q & A」ハームフルな教師／ハームレスな教師 315 / 手続きの公正を確保する 323 / 学校を小

さな民主主義に 328 / 笑顔の子どもたちと出会うために 330

参加者のみなさまからの声 336

対談を終えて 「いじめマルチリートメント」への理解を（荻上チキ） 340

# 教室マルチリートメントの処方箋

## ——対談を終えて

対談を終えて<sup>348</sup> / 「指導者の窮屈さ」論を乗り越える<sup>351</sup> / 傷つき体験は怒りになる<sup>354</sup> /  
 教師の「正義のフィルター」の構造<sup>356</sup> / 思い描くイメージと実際との落差を埋めるのは、マニユ  
 アルや手引ではない<sup>356</sup> / 「観」を磨くことの大切さ<sup>359</sup> / 人間観を磨く<sup>360</sup> / 関わりの基本  
 的な原則<sup>362</sup> / 「主体的に生きる存在」としての子どもを支える教師の態度<sup>363</sup> / 教師自身も  
 「主体的に生きる人」を実現する<sup>366</sup> / 人生からの問いかけに対して応えていくこと<sup>367</sup> / 「ホ  
 モ・パティエンス(苦悩する存在としての人間)」であり続ける教師<sup>369</sup>

おわりに

教室「安全基地」化計画ブックガイド



編著者

## 川上康則

かわかみ・やすのり

東京都杉並区立済美養護学校主任教諭。公認心理師、臨床発達心理士、特別支援教育士スーパーバイザー。NHK Eテレ『ストレッチマンV』『ストレッチマン・ゴールド』番組委員。立教大学卒業、筑波大学大学院修了。肢体不自由、知的障害、自閉症、ADHDやLDなどの障害のある子に対する教育実践を積むとともに、地域の学校現場や保護者などからの「ちょっと気になる子」への相談支援にも携わる。著書に、『〈発達をつまずき〉から読み解く支援アプローチ』（学苑社）、『通常の学級の特別支援教育 ライブ講義 発達につまずきがある子どもの輝かせ方』（明治図書出版）、『子どもの心の受け止め方』（光村図書出版）、『教室マルチリトメント』（東洋館出版社）など。



第2章 村中直人×川上康則

学校現場の「叱る依存」と  
教室マルチリートメント

第2回のゲストは、臨床心理士・公認心理師の村中直人さん。最新刊『へ叱る依存』がとまらない』は、「誰かを罰することで、脳の報酬系回路が活性化する」という衝撃の研究報告をきっかけに生まれました。脳科学や認知科学の知見をもとにしながら、叱ることの依存性とエスカレートするメカニズムを解き明かし、その上で「叱る」と上手く付き合う方法を考えた書籍で、大ヒットとなりました。同書では「学校現場の（へ叱る依存）」へも言及があり、「理不尽なルールの遵守」の科学的妥当性のなさや、その強要が子どもを随伴的なストレスにさらし、学習性無力感を植え付けることなどが指摘されています。（へ叱る依存」と「教室マルトリートメント」の親和性の高さがあらためて感じられる、深い議論となりました。



## 村中直人

むらなか・なおと

臨床心理士、公認心理師。一般社団法人子ども・青少年育成支援協会代表理事、Neurodiversity at Work 株式会社代表取締役。人の神経学的な多様性に注目し、脳・神経由来の異文化相互理解の促進、および学びかた、働きかたの多様性が尊重される社会の実現を目指して活動。2008年から多様なニーズのある子どもたちが「学びかたを学ぶ」ための支援事業「あすはな先生」の立ち上げと運営に携わり、現在は「発達障害サポーター'sスクール」での支援者育成にも力を入れている。著書に、『ニューロダイバーシティの教科書』（金子書房）、『へ叱る依存』がとまらない』（紀伊國屋書店）など。

イントロダクション／川上より(20分間)

→ 対談(75分間)→ Q&A(20分間)

## 「イントロダクション／川上より」感情労働としての教師

川上 今日セミナーは、もう念願中の念願で、村中先生をぜひお招きしたい！ と思っていました。なぜかと言いますと、まず、村中先生の『ニューロダイバーシティの教科書』（金子書房）を読んだときに、心をつかまれたこと。特別支援教育という文脈で言えば、「ああ、なんてポジティブで次世代の考え方なんだ！」っていう感じがしたんですね（※ニューロダイバーシティ (neurodiversity) は、「脳や神経、それに由来する個人レベルでの様々な特性の違いを多様性と捉えて相互に尊重し、それらの違いを社会の中で活かしていこう」という考え方であり、社会運動を指す言葉。版元HP書誌情報より）。そして、『教室マルトリートメント』の校正作業中に、最新刊『叱る依存』がとまらない』（紀伊國屋書店、2022年2月）が刊行されまして、「これはすごい本が出た！」と、衝撃を受けました。もう拙著の作業も終盤でしたから「なんでこの本を『教室マルトリートメント』の参考文献に入れられないんだろ」と悔やんだくらいに、重なる話題も多い本ですから「叱る依存」がとまらない』『教室マルトリートメント』2冊セットでご購入いただいた方もきっと多いんじゃないかと思っています。

さて最初は、イントロダクションという形で私のほうから、なぜ教室マルトリートメントが起きるのか、それから、私たち教師のいろいろな事情についてお話しした後、村中先

生にも登場していただいて、一緒に学校現場のことを考えていこうというふうに思っています。

まず、今までの「不適切な指導」の考え方についてですが、例えばコンプライアンス研修などで体罰防止に関することや人権研修などでわいせつ行為に関することなどは、学校現場でも研修がないわけではありません。ただ、「これをやったら一発アウト」という事案に関しては予防の研修が組まれる一方で、何か、日頃から見ている「何だろう、この違和感」みたいなこと——つまり、違法行為とは言えないけれども、「これって問題のない指導のほうに入っていて、いいんだらうか？」みたいなグレーな事案というのをなかなか取り扱えていなかったような気がするんですね。それは、おそらく読者のみなさんや今日参加してくださったみなさんも、違和感として感じてこられたんじゃないかと思います。

「白か、黒か」という線引きではなくて、何かそれに至るまでのグレーゾーンがあるんじゃないか。それは、まだ信頼関係さえ形成されてないにもかかわらず、強い指導であったり、見捨てるような言葉であったり、あるいは、一生懸命拳手して指名してほしいというアピールを子どもがしているのに教師から無視されて気持ちが悪くすぶっていく……といったことまで含めて、「心理的虐待」や「ネグレクト」に類似した指導を、私たちは割と看過してきた、または、半ば黙認までしていたんじゃないかと思っています。

常に教室の中ではマルチトリーメントが隣り合わせにあって、子どもたちを知らず知ら

- 保育や教育は「感情労働」
- 感情労働＝肉体労働や頭脳労働に続く第三の形態。  
人と直接的に接することが生業。<sup>なりわい</sup>  
学校も園も、人がいなければ始まらない。
- 子どもたちとの関わり、保護者との関係、  
同僚との協働関係、先輩への気遣い、  
後輩へのOJTなど、常に人との関わりが付きまとう。
- この仕事は感情の抑制・忍耐・緊張感が  
付きまとうものなのだ<sup>と</sup>理解する必要がある。



自らの感情を制すものは、教室を制す

## 図 2-1

本来、保育・教育は「感情労働」の職場

ずのうちに傷つけているような、そういう指導があるんじゃないか。そこに言葉を当てることによって可視化され、日常を見直すという視点に立てるんじゃないか。そんなふうに感じていきます。

「感情労働」という言葉をみなさんご存じでしょうか。本来、保育も教育も「感情労働の職場」だというふうに言われています [図2-1]。

「感情労働」は、肉体労働や頭脳労働に続く第三の形態です。学校、保育所、こども園、幼稚園。「人がいなければ始まらない」という職場ですね。中でも学校は、何かその最たるものというか、究極レベルにあるんじゃないかと思うんです。というのも、子どもたちとの関わりだけでなく、保護者との関係づくりがあります。それから、同僚との協働関係、先輩への気遣い、後輩へのOJT (On the Job Training) ……常に人との関わりが付きまといまいます。この仕事に就いた以上、感情のコントロールに対して賃金が支払われているんじゃないかという意識は必要だと思うんです。だからこそ、自らの感情をコントロールするということが大事になってくる。

そして、感情をコントロールできなくなる場面もまた常に隣り合わせにあるというのも忘れちゃいけないことだと思います。日常、聖人君子でいるというのはもう至難の業だと思えますから、「こういう場面で追いつめられていくよね」というようなことはあらかじめ押さえておく必要があります。

- ① 時間がない（やるべきことがある）
- ② やり方が分からない
- ③ 大人側の解決能力や我慢が足りない
- ④ 助けてくれる人がいない（理解者不在）
- ⑤ 他者の視線（他者評価）



気持ちの「余白」がなくなる  
笑っていられなくなる  
迷いも生まれやすい

**図 2-2**

感情をコントロールできないときの  
「追い詰められ感」の理由